

「女性の働いていく力は地域産業を支える大きな力」

私が浜松の看護学校に入って2年生の時に、看護実習に行きました。そこで、白血病の女性患者と出会ったんですね。その方の体調が良くなって、退院するという時にカツラを買うことになったんですが、そのカツラが凄く値段が高かったです。その時は、情報がなくてパンフレットも一つしかなかったので、患者さんはそれを見て、高くてカツラを買うのを諦めてしまったんです。私自身、学生で、時間があつたのでインターネットなど



インタビューを受ける佐藤さん

で調べてみたら、あまりカツラの情報が無く、病院自体にも情報がなかったんです。

その時、私は凄く悔しい想いをしたんです。結局、患者さんは3年生の時に亡くなってしまいました。彼女のお通夜の時に行ったら、彼女はバービー人形みたいなテカテカのカツラをしていました。きれいな、しかも肌も白い方だったのに、凄く寂しい思いをしました。看護っていうのは、病院だけとするものではなく、その人が病気になった時に、病気と共に生きていく人生を「どうやって生きていこう」という方法を考えたり、実際何を使ったらいいの、どう使ったらいいのかを一緒に考えて、患者さんにとってベストのゴールを作っていくというのが、看護の仕事なんです。

それは病棟で働いていても実際には時間も無いし、難しいこと。それを外でやりたいと思ったのが今の仕事をやるきっかけです。外でやるんだったら、公共から資金をもらったり、寄附をもらったりでは駄目だと思ったんですね。皆さんは、美容院に来られてるわけじゃないですか。ガンになって髪の毛が抜けたからといって、いきなり福祉にかかる必要はないと思うんです。その瞬間からかわいそうな人にならなくてもいいと思うし、皆さんは「お金を払うから何とかしてよ」って想いが強いんです。

浜松市は比較的女性の就業率が低いと思います。一方で、パートで働いている方が凄く多くて、平均的にパート職のお母さん達が多いのが現状。月4～5万円の収入の方が多い。その収入を食費に回したり、自分の楽しみのお金にしたり、家族のお金にしたりと普通の暮らしに充てている方が多いのです。その人達が、病気になって治療費を払います、カツラは何十万円と払いますといったって、出費できるお金は、自分自身の生活のお財布からは無理なんです。浜松の女性は奥ゆかしいので、結局「我慢するわ」ということになる。どんどん引きこもってしまって、治療上もよくない。

私は、「女性の働いていく力は、地域産業を支える大きな力」だと思っています。その力が続かなくなるというのは、市の全体の力、地域力が落ちていってしまうことになる。

そういうものをちゃんと払える金額で、行きやすい所でしっかりとサポートできれば、女性のワークライフバランスを支えていけるのではないかと。そう考えて、今の美容室事業を経営しています。

人から寄附をもらってやるとか、福祉事業でやるとかもあるんだけど、私は普通の美容室を経営し、お客様からお金をいただいて運営するというビジネススタイルでやっています。

「浜松で事業がうまくいかなければ、どこへ行っても駄目」

私は浜松市出身なんですけど、やっぱり浜松でこの仕事をやりたかったんです。私が思うのは、この浜松の地域で駄目だったら、たぶんどこへ行っても駄目だということ。私は、浜松市で生まれて、浜松で育っている。大学は一旦他へ出たけれども、またここへ戻ってきました。つまり自分自身一番良くわかっているのがここ浜松なんです。友達のネットワークがあるし、人のつながりもあるし、いろんな事を知っているこの



街で、地域事業ができないようでは、駄目。東京でやっても駄目なんです。しかも浜松市は政令指定都市で、人口80万人の都市。このサイズの、こういう市は全国にはたくさんあります。だから、ここでできたモデルは、他でも役に立つモデルになる。だから、地元の浜松市を選んで今まで来ています。

カツラは中国で作っていて、学生の時にインターネットで調べまくって、作っている工場が中国にあるというのがわかったんです。その工場に何回もアポイントをとるんだけど、先方にとっては、私がどこの誰だかわからない。浜松市のことも全くわからない。「浜松市は東京と大阪のどっちにあるんだ」って聞かれたこともあります。そんな事もあり、交渉が全くできなかった。

中国に行ったのは、看護学校3年生の時なんだけれども、「どうしてもカツラを作りたい」という想いが強かった。でもお金がないから高いものは作れない、だけど質の高いものは作りたいと。最初は全然私の話を聞いてくれませんでした。是非こういうものを作りたいと何回も説明したら、「将来ひょっとしたら大きくなるかもしれないから、契約をしてあげるよ」って。そこからカツラを作りはじめました。その後、インターネットで売ったりとかもしていました。

「元気で働けるのは、やりたい事がはっきりしているから」

現場での看護実習の時に、私の母と同じ歳の患者さんがいました。その人はずーっと働いてきて、ある時検診を受けたら、異常数値がでて、検診の結果がでたその日に会社へ行ったら、すぐに病院へ行けと言われた。病院へ行って採血したら、明日主人と一緒に病院へ来てくださいと。病院へ行ったら、医者から「白血病です」と宣告されたんです。しかも、かなり進行していると。「このまま入院してください」と言われ、クリーンルームに入れられて、人生の整理をしようと思ったその瞬間にカツラがないで終わりなんだと。その時私は凄くやしくて、私何にも患者さんにしてあげられないと悩みました。でも何か方法があるかもしれないから捜してみると、患者さんに言ったら、「無いならしょうがない」と諦めているんです。その患者さんは、子供も教育にお金がかかる、主人は老後にお金がかかる、私のように死んでいく人間は、そんなにお金をかけちゃいけないんだと・・・。



愛犬の“あずき”と“こむぎ”

その患者さんの声を聞いたら、私、凄く寂しくなってしまったんです。カツラがあれば、病院から外出した時に会社の整理も自分の人生の整理もできる。患者さんは、カツラが無いだけで人生を諦めてしまう、ご近所さんに見られるのもいやだという思いも強い。だから、財政的に続けられるような仕組みを作りたいと考えたんです。

私がこうして元気でいられるのは、仕事をしていく上で原因があって、やりたい事と、結果がわかっているからなんです。全国には、年間約5万人ぐらい、このような患者ができています。浜松市の人口で換算すると、年間400～500人が浜松市にいるということになります。その中で旧浜松市は約50万人としても、250～300人ぐらいは、人と会う仕事をしています。そういった意味でも、今の仕事は、公共的な事業であるけども、ニーズがある当たり前の事業なんです。

この事業は、福祉の気持ち、ボランティアの気持ちではなくて、商売の気持ちでちゃんと仕事ができるし、もちろんお客さんが喜んでくれるとか、いろんな事を学ばせてもらっています。この仕事は専門職だし、専門でやれることはやりたいし、自分のエゴも活かせるし、当然商売も成り立って、私達の生活が成り立って、給料もちゃんともらえるし、お客さんも元気になってニコニコして帰っていく。そういう「楽しい事」のいい連鎖ができる。それがあるので今の仕事が続いていっているのかな。この仕事は、凄いい仕事でも何でもない。どの仕事でも見方しだいだと思う。あえてNPOでも福祉でもないお店で、株式会社であるということで、お客さんにとって行きやすいお店になるんです。お客さんから

